

## II 大学 大学教員 学生

大学や大学教育に関する考察は、大学教員や大学生にとって、自分の日常を振り返ることでもあり、自己洞察、教育についていろいろ考えることに役立つ。

### 1 授業でのボーナス・ポイント

#### A 大学での学生との会話(T;私、S；学生)

「発表の時、詳しいレジメを作ってくると、点数は上がりますか？」(S)

「別に、点数とは関係ないけれど、、、」(T),

「では、レジメを作るのはやめます」(S)、「・・・」(T)

#### B 大学での学生との会話(T;私、S1,S2；学生)

「授業の中で、3分間スピーチをしてくれた人にはボーナス・ポイントを上げます。スピーチしてくれる人は申し出て下さい」(T)。

「スピーチはやりたかったのですが、点数の為にやりたくありません。ボーナス・ポイントがあるのなら、スピーチはしません」(S1)

「もらえるものは、もらえばいいのに」(S2)

学生のボランティア（自主的行動）に対する評価は、難しい。(2012年12月10日)

### 2 学び(学修)の自己評価について

教育において自己評価ということを言われて久しいが、その意味(価値)についてこれまでほとんどわからず、最近になって少し知ったことがあるので、書き留めておきたい。

私はこれまで評価というものは、自分の外の基準で行うもので(外部評価)、自分で評価するなどというのは主観的で客観性がないし意味がないと思っていた。

大学でいえば、大学ランキングというものがあり、偏差値、就職率、科研費の額、有名人輩出率など、外部の基準で判定してランキングが作られている(ただ、大学生活の満足度などは、学生の自己評価によるものなので、自己評価といえなくはない)。

高校でいえば、偏差値や有名大学進学率、スポーツの実績などの外部基準でランキングされている。公立の小中学校には、全国学力調査があり、都道府県別だけでなく、各学校の学力平均が算出されている。これら、皆外部の基準での評価であり、自己評価ではない。

先日、植草学園大学のFD研修会に参加して、関西国際大学学長の濱名篤氏の話聞く機

会があった。その講演のテーマは「学修成果の可視化と質保証」というもので、自己評価を含んだ定性的評価（質的評価）の話であった。

ここでは、ルーブリックや学修ポートフォリオ等を使って、大学や学生がどこまで学修したのかを自己評価することの重要性が強調されていた。確かに、大学生たちは試験やレポートの評価が優良可不可などで付けられ、そのような外部的な点数だけでは、自分がどのような点が学修できてどのような点が学修できていないのかはわからない。その点、ルーブリックや学修ポートフォリオは、自分の学修を自分で評価するものあり、自分の優秀性や劣っている点を、自分で具体的に知ることができるものである。この意味で、学修の自己評価というものは、外部評価より優れているかもしれないと思った。

また濱名氏は、大学には「リフレッシュ・デイ」が必要と提案している。それは「各学期の試験やレポート等を返却することにより、最終的にはどのように評価されていたかを明確にし、自分の学習成果を確認し整理することにより、自分の得意な点や不得意な点を明確にして、次の目標設定につなげてゆく取り組み」である。

確かに、大学でも試験答案やレポートの返却し、学生の学修できた点や出来なかった点を具体的に示せば、学生に対する効果は大きいであろう。これは、多分アメリカの大学ではやっていることである。これを日本でやるためには、日本の大学の授業のシステムをかなり変えなければならないであろう。(2019年3月21日)

### 3 教育実習の効果

6月は、教職課程を履修している学生にとって、教育実習の季節。小学校の場合、4週間と長い。

学生も教育実習の前と後ではかなり違い、大きく成長している。それは、単に教育実習の効果というよりは、それまでの大学での授業や演習の結晶化を表しているのであろう。

学生は教育実習の経験を通して、教員の大変さを知り教員志望を諦める学生もいるが、一般的には、教職への意識を強める学生が多い。中には、教員にはならない免許だけほしいと言っていた学生が、教育実習の経験を経て、強い教員志望に変身する場合もある。

先週は南房総の最南端の小学校で実習の学生がいて、その精錬授業を見学に行った。南房総も過疎化が進み、学校を統合しても、1学年1学級で、その人数も20名強。国語のいい授業を展開していた。校長先生は、千葉敬愛短大の出身の素敵な女性校長だった。この学生も、教育実習でまた一段と成長して、大学に戻ってくるであろう。(2014年6月9日)

#### 4 現代学生考

これまでいくつかの大学で学生に接してきた経験から、大学と大学生に関して考えてみたい。自分の場合は、受験勉強を終え大学に入学して受けて授業はさっぱり心に響いてこなかった。それで大学の授業を諦め、大学外に知の源泉を求めた（読書等）。

1970年代後半に大学教師になり学生に接してみると、大学の講義への出席率は2割程度と低く、大学生活の中心は友人関係とサークル活動であった（スキー、テニス、マージャンは定番）。学生たちは厳しかった受験競争の疲れを4年間のモラトリアムの期間に取り、企業戦士として社会に出ていった。企業も受験学力は評価したが、大学教育には何の期待もしていなかった。

1990年代以降になると、大学の授業改革が進み、「大学の学校化、学生の生徒化」が進行して、学生たちは素直になり、授業への出席率は急速に高まった。学生たちは大学の授業から何かを学ぼうと考えたのであろう。情報化社会になり情報量が膨大となり学問が高度化しているので、どの分野でも基礎的な部分は大学で学ぶ必要が生じた。それで知識は大学の授業から得るもので、大学外から学ぶという意識は薄れていった（読書の習慣がなくなった）。

『キャンパスの生態誌』（潮木守一、中公新書 1986）によると、大学には、「自動車学校型」「知的コミュニケーション」「予言共同体」、の3つがあるという。現代の大学をみていると、この3つが薄められた形で存在していることを感じる。資格試験や採用試験に向けての知識技術の習得（自動車学校型）、ゼミや演習の必修化（知的コミュニケーション）、行動を推奨するアクティブ・ラーニング（予言共同体）。さらに、幼い頃からのデジタル環境の影響（スマホとゲームの世界への耽溺）と社会的貧困からくるアルバイト生活が加わる。

これらをバランスよく配置し、大学生活を送ることが今の大学生に求められている。大学生活満足度は年々上昇していることから、それは成功しているのであろう。ただ、学生の批判精神が薄れていることが気がかりである。（「内外教育」ひとこと、2019年10月8日）

#### 5 大学での講義と私語について

同世代の元大学教師のN氏が、私が以前に「敬愛大学国際研究30号」（2017年）に書いた「学生、大学教育、学問他について—教育社会学からの考察」（下記、再掲）を、読んでくれたようで、電話で大学の授業での私語のことが話題になった。N氏は私が「大学の授業という場で、私語やスマホいじりが頻繁にみられる」と、書いたのが気になったのであろう。

N氏は、授業の初回に学生に、「良い授業をする、私の授業を真剣に聴かなければ、皆さんが損をする、私語・内職や居眠りなどを禁止する」と明るく宣言するという。そのことは自身に「相当なプレッシャーを与え、頑張るエネルギーになり、自分にもいい授業を行うこ

とを課し、学生の為になる授業をやるように努力する」という。このように授業の最初にきちんと教員の意向や意気込みを話すと、以後の授業ではほとんど私語はないという。もっとも N 氏は博学の方で著書や論文の多い研究者なので、その講義内容は密度の濃いものだと推察される。同時に落語が好きで、落語から話し方や間の取り方を学んで、それを自分の話し方も取り入れたという。

私の授業観や実際の授業は N 氏のものとはかなり違っていたと思う。「私のこれまでの大学での教員人生を振り返ると、とにかく書かれた優れた資料を探して、その説明に終始してきたように思う。話し方を工夫したこともない。内容さえすぐれていれば、学生はそれに感銘を受けると考えてきた。」と以前のブログに書いたことがある。つまり話し方に工夫が必要とあまり感じたことがなく、その改善の努力もしてこなかった。学生はさぞ聞きづらく、退屈だったのであろう。

私の教室での講義は、どこでもかなり私語が多かったのではないかと思う。上智大学時代の「教育社会学」の講義では、聴講している学生の中で私のゼミ生のおしゃべりが一番多い時もあり閉口したことがある。少人数の講義より、かえって上智全学から受講者が 300 人以上いた「教育原論Ⅱ」の授業の方が、私語がなく静かであった。

私の私語観は、「現代学生の私語」と題して「IDE・現代の高等教育」(NO323、1991) に書いたことがある。それを読んだ同僚の先生から、「学生に甘すぎる」と批判されたものである。今、読んでもあまり意見は変わっていないので、今私が大学で講義をしたら相変わらず私語が多くなることであろう。

私が大きな影響を受けた研究者のひとりに作田啓一がいる。作田啓一の著作は何度も読み返した。ただ、教えを受けたこともなく、面識もない「師匠」である。武蔵大学のゼミで作田啓一の「価値の社会学」(岩波書店)をテキストにして、作田啓一がいかに素晴らしいかを力説したことがある。ゼミ生のひとりが京都に行った折、京都大学の作田啓一の授業に潜る込み聴講してきて、その様子を報告してくれた。「ぼそぼそと小さな声でしゃべり、ほとんど聞き取れなかった」とのこと。本の文章は緻密で明晰なのに、話はひどいのかと思った。そのことで、氏への尊敬が薄れたことはない。(2022年1月29日)

## 6 オチやボケのある授業ー関西と関東の大学の違い

東京育ち、湘南住まいの知人が、大阪に住み、関西の大学に勤めるようになってもうすぐ1年。彼は、大阪が面白く、たいそう気に入っているようだが、学生から、「先生の話にはオチがありませんね」と言われて、ショックを受けたということを、年賀状に書いてきた。

昔全国大学生協のシンポで、私の前の報告者の竹内洋氏(当時京都大学助教授)の話聞いて、青ざめたことがある。話はユーモアに満ち、ボケとオチがありで、聴衆は爆笑とともに聞き惚れていた。その後で、どのような話をすればいいのか冷や汗ものだった。居直って

データの解説に徹し、その場を凌いだが、関西の話文化の伝統のすごさを知った。

自己卑下や自虐的などの自分を低く言うのは、関西の漫才の文化と、確か多田道太郎が書いていたと思う。つまり、漫才は、最底辺の位置に自分を置いて聴衆の優越感をくすぐるものである。ボケ（自虐）に対するツッコミは、それに対する優れたリアクションであり、関西では日常化しているという。

それから、私は自分の講義にも努力してボケ話やオチを入れるように努めたが、学生の反応はイマイチ。関東の大学で、自分がボケた話をして関西風にツッコンではくれなくて、その通りにとられ、憐憫と軽蔑の混じった視線を向けられる。

私は関西で生活したことはないが、関西の血は流れており（父が兵庫の出身、親戚は関西に多い）、関西人の祖母によく面倒を見てもらい、関西弁、関西文化に浸ってきたので、関西の文化は身体化されているはずである。これまで関西の大学で教える機会がなく、それが試せていないのがとても残念。（2013年1月9日）

## 7 京都大学の教育社会学の学風

同じ「教育社会学」の講座でも。京都大学の教育社会学研究室の学風が全く違い、政策研究や実証的な研究よりは、理論的、歴史的、文化的（時に文学的）、人間的な研究が主流だったのではないかな。

私自身は、京都の学風を作田啓一や多田道太郎、井上俊、竹内洋氏らの文献を読むことでしか知ることが出来なかったが、京都の教育社会学の研究室で学んだ石飛和彦氏（天理大学教授）は、当時の研究室の授業の様子的一端を、氏のブログに書いていている。その箇所を読むと、東大とはかなり授業の内容や雰囲気や学問の継承の仕方が違うことがわかる。氏のブログより一部転載させていただく（転載箇所は、非常勤の大村英昭教授のこと）。

くたしか大学院の M2 のときに大村英昭先生が集中講義でいらしたんだってと記憶する。ゴフマンの話をして、たしか落語のような口調とあいまってすごくおもしろかったという印象の記憶があり、また、ゴフマンの邦訳書についていろいろ言っておられたような記憶がある（まあ翻訳についてというか…「出会い」って何なんだ、とか…）。ジラルールの模倣欲望についても話しておられたような覚えもあり、自分はレポートでジラルールについてなんか文句を言ったような言わなかったような M2 的イキリを発揮したようなものを書いて提出したような覚えもある。ともあれ、大村先生は、面白くてすごく切れる、恐ろしい先生、という印象なんである。（中略） また、大村先生が、自殺の例として「いじめ自殺」をあげて、それを、正当にも「愛他主義」（と「宿命主義」）に関連付けているところに共感しつつ、自分も以前そんなことを書いたり学会発表したりしたなあと思い出したりしてた。それはまあ、世代、ということで、大村先生のものを読み、また集中講義を受け、またそこから

自分はエスノメソドロジーのほうに行きたいと思って、じゃあ何をどう考える、とか、また薬師院さんのデュルケーム論を読み、そのうえでデュルケーム=ゴフマン=ガーフィンケルの線で何が考えられるか、みたいなことをぐじゃぐじゃいいつつ大学院生時代を送っていた世代なわけだから、まあ、この本は、なにか懐かしい、しかしそこから自分は何にか別の一步を進めようとしていまに至る、みたいな、そういうかんじが、個人的に、したわけである。(以下略) (2020年9月)

## 8 大学の遠隔（オンライン）授業について

8月5日朝日新聞は、大学のオンライン授業について、「これが授業と呼べるのか」「友達ゼロで夏休み」「オンライン授業 憤る学生」「メンタルケアも課題」という見出しで、オンライン授業が問題であるという論調で、記事を掲載している。また今週の週刊ダイヤモンドは、大学のオンライン授業の不備と学生のオンライン授業への悲鳴を特集している。

これを読むと、高い授業料を払いながら、いろいろな相談を大学の教職員にもできず、大学の施設を使えず、友人も作れず、サークル活動もなく、繋がりにくいZoomの授業、教科書を読んで課題に答えなさいという手抜きの授業、課題ばかり多くて、提出してもコメントもない授業、訳の分からない実験の指示など、学生のストレスがかなり高まっていることがわかる。

しかし、大学や大学教職員も努力をして、オンラインでさまざまな工夫をしている事例も多いのではないかな。

私は、講義ノートと授業資料を15回分、大学の教務のサイト(KCN)で配信して、毎回の課題への解答を200字~1000字で求め、それへのコメント返すだけのシンプルな方法をとっている。学生の学びと解答は、例年の教室での講義以上によいものが得られている。それは、授業資料をいろいろ工夫したせいもあると思うが、活字を読んだり映像を見るのは皆と一緒に、一人で自分のペースで閲覧してもらった方が、理解が深まるように思う。教室での授業では、スマホをいじったり私語をしたり友人に気を遣い授業に集中できないことが多い。

高等教育に詳しいK氏より、次のようなコメントももらっている。「問題は教師の方で課題ばかり大量に出して、一切フィードバックがないなど、これまでの手抜きをオンラインで続けている者が少なくないようです。学生も教師もこれまでとは異なる授業形態であることを十分に認識せず、従来の授業の延長で考えていては、オンライン教育は質が低いということ立証することになります。」デジタル時代の大学の授業に関しては、考え方を考える必要があるように思う。(2020年8月7日)

## 9 大学の遠隔授業の効用

新型コロナ禍で、大学は新学期より遠隔授業をはじめ、そのまま継続した大学が多い。学生の通学時の過密を避けたいという理由が主なものであろう。また遠隔授業を行う設備とデジタル能力が教員と学生にあったということでもある。

遠隔授業には大きく二種類あり、一つはズームのように同時配信・双方向の形態、もう一つはオンデマンドの形態。学生からは、遠隔授業に対しては不満も聞かれる。「ネットが繋がりにくい」「教室で皆と一緒に勉強したい」「キャンパスライフを楽しみたい」等。教室での授業より遠隔授業の方が、学生の自主的学習時間が増えるということを指摘したい。

昨年11月に行われた文部科学省の「全国学生調査」によれば、日本の大学生は授業にはよく出席する（週に11時間以上出席する学生が72%、平均17時間）が、「予習・復習・課題など」をする学生は少ない（週に5時間以下と少ない学生が67%、平均5時間）。

アメリカの大学には、学生を勉強させる仕組みが整備されている。各授業の必読文献が配布され、討論、ノートの特検、レポート、試験問題と学生を勉強させる仕組みは整っていて、学生の自主的勉強時間は長い。

日本の大学でも授業改革が行われているが、「全国学生調査」の結果が示すようにその成果はあがっていない。それが、遠隔授業で様変わりした。

遠隔授業になると、通学時間、友人との私語、教師の叱責や無駄話等がなく、学生は授業の内容や課題に集中でき、自主的学習時間が確実に増える。教室にいる時のようにスマホをいじったり私語したりをして、授業をやり過ごすことはできず、課題の文献を自分でじっくり読まざるを得ない。遠隔授業の効用は意外と大きい。

今後は遠隔授業も定着して、教室での授業との併用になることが考えられる。これを契機に日本の大学の授業や学生の学び方が変わることを期待したい。

（「内外教育」ひとこと、2020年8月4日）

## 10 新型コロナ禍の大学生の勉学態度

大学教育学会が、会員を対象に、各大学各教員が新型コロナ禍に対してどのような対応をしたかの調査を昨年秋（10月）に実施し、その結果をHP（下記）に公開している。

概要を千葉大学の白川優治氏（教育社会学）が「教育学術新聞」に書いている。調査の回収率が24.7%、回答数312件と少ないのが少し気になるが、今年度前期の大学や教員の対応、（教員の目から見てのことだが）学生の反応などが示されていて興味深い。

「授業や課題に対して意欲的に取り組んでいた学生」の割合は、「9～10割」が30.3%、「7～8割」46%と、多くの学生が意欲的に取り組んでいる。またコロナ禍以前と比べて学

生の授業や課題の取り組み状況について 40.6%が「良くなった」と感じており（「変化なし」27.8%、「悪くなった」5.7%、「一概に言えない」19.2%）、学生の学習状況に対して肯定的な評価が多くみられた。（2021年2月6日）

## 1.1 新型コロナ禍と大学生

新型コロナ禍で多くの大学で、授業が遠隔になり、大学への入構も制限されている。その為、大学生が対面授業を受けることができず、サークル活動も交友関係もなく大変な不満とストレスを抱えている、と論じられることが多い。実際はどうかであろうか。大規模な大学生調査から、その実態を見てみたい。

参照するのは昨年10月～11月に全国30大学11,028名から回答を得た「CAMPUS LIFE DATA 2020」。（全国大学生生活協同組合）

「学生生活は充実している」と答えた学生は74.2%で、1年前より14.6%減少している。学年差がある。「充実している」は1年生56.5%、2年生77.1%、3年生81.5%、4年生86.4%と、通常のキャンパスライフ未経験の1年生の不満は高い。2年生以上は前年とほぼ変わらない。上級生は対面授業やサークル活動がなくても、大学生活の充足度は変わらないと感じている。

大学は新型コロナ禍の中で遠隔授業が主になりになり（72.8%）、学生たちの勉強時間は増加している。授業や大学外の勉強時間の1日の平均は5時間21分と、前年より28分増加している。読書時間も1日32分と2分増加している。「大学生活の重点」では「勉強・研究」（33.4%）が1位で、高い水準を維持している（40年前19.5%）。

このように、大学の遠隔授業で、生活の中心が勉強になっている。これまでの大学生の生活が、授業に出席さえすれば私語をしてもスマホをいじっていても楽々に単位が取れたものが、遠隔授業になり自主的に勉強しない限り単位の修得が難しくなっている。教室での友人との私語はできないが、ズーム等で議論はでき、友人関係は成立する。教員は一人一人にコメントを送るなど、学習弱者への配慮も増やしている。

アルバイト収入は1か月自宅生37680円、下宿生26360円で、前年度よりそれぞれ4～7千円減少している。小遣いや仕送りも減っており、支出を切り詰めた学生生活を送っている。大学生に必須の「合宿」「留学」「旅行」「就職活動」は大きく減少している。国や各大学の学生への経済支援が必要であろう。学生の気にかかっていることとしては、「就職のこと」が一番多い（42.7%）。

このような学生の実態もふまえ、コロナ禍時代の大学のあり方として、遠隔授業を工夫し、サークルや友人関係もヴァーチャルを生かし、学生が自主的に学び、卒業後のリモートワークにも適応できる能力や資質を育てていくことが必要であろう

（「内外教育」2021年5月18日）



## 1 2 オンデマンドの大学の授業 一武内 2021 年度 後期授業 「教育課程論」

今年度（2021 年度）後期は、敬愛大学で 1 コマだけ担当した。科目名は、「教育課程論」（中高向き）で、受講生は教育学部と国際学部の学生が 55 名、経済学部が 19 名、合計 74 名である。授業形態は遠隔のオンデマンドで行った。

基本的には、毎回 KCN で「講義メモ」と「授業資料」を数枚配信し、講義メモの最後に書かれている設問に、200 字から 1000 字の字数で答えるよう指示した。学生の書いた解答（コメント）には、毎回個々の学生にコメントを返したので、その数は 1000 を超えたことになる。

私の授業の場合、学生は教室での対面授業より、遠隔の授業の方がよく「講義メモ」や「授業資料」をよく読み、しっかりした解答（コメント）を、毎回寄せて来ているように思う。学生にも他の受講者の解答（コメント）の一部を解答例として、匿名で、KCN のクラスフォーラムで知らせている。今回の毎回の講義テーマは、下記のようなものである。

第 1 回 教育課程とは / 第 2 回 教育課程の 2 側面 / 第 3 回 学習指導要領の変遷 / 第 4 回 「主体的・対話的で深い学び」とは / 第 5 回 教育に関する WEB サイトを読んだ感想 / 第 6 回 学校と地域社会の関係を考える。 / 第 7 回 新型コロナ後の教育 / 第 8 回 中学生・高校生の特質、生徒文化 / 第 9 回 ジェンダーと教育 / 第 10 回 受講者の解答（コメント）を読んだ感想 / 第 11 回 新型コロナ禍と教育（敬愛大学シンポの感想） / 第 12、第 13 回 総合的な学習の時間 総合探求について（静岡県立大学の学生作品への感想） / 第 14 回 高校教師について。高校の新教育課程 / 第 15 回 まとめと最終レポート課題（2022 年 1 月 17）

## 1 3 ズームによる大学授業一 馬居静岡大学名誉教授の授業

大学の遠隔授業は、ズーム行われることも多い。その記録を HP (<https://www.uer-labo.jp>) に残している人がいる。それは 静岡県立大学「総合的な学習・探求の時間の教育・指導法」の 2021 年 9 月に行われた同教授の集中講義である。私の敬愛大学での授業でも、その記録を読んで感想を書いてもらった。その感想も掲載されている。

今の学習指導要領で重視されているアクティブ・ラーニングや「主体的、対話的で深い学び」は、全ての教科で提唱されているものだが、「総合的な学習の時間」（中学校）や「総合的な探求の時間」（2022 年度から、高等学校）が、一番実践しやすい時間（科目）である。それを教職課程の授業で教えるのには、その背後の理論等を学生達に講義すると同時に、それを実際に学生達に協働学習で実践してもらうのが一番効果的であろう。この授業ではその基礎や背景になる論文、著書、答申が多数のものが教材として提示されている。それも大変参考になるが、実際の授業の様子が詳細に記録され（多くのゲストの講義もある）、さら

に、学生の協働学習の成果が、記録に残されている。一つの成功した、模範になる大学の授業だと思われるので、ここで紹介させていただく。(2021年12月24日)

#### 1.4 大学生も一人一台 PC で授業を受講する時代

小中学校等に児童生徒一人一台の情報端末(タブレットなど)が配布されているが、大学生も情報の端末つまり PC (パソコン) を、各自教室に持ち込み、授業を受ける時代になっている。

それは、学生がノート代わりに PC を教室に持ち込むということではなく(もちろんそのようなことはこれまでもなされてきたが)、教員が PC を各自授業に持ってくるように学生に指示し、学生が各自 1 台の PC が手元にあるという前提での授業が展開されるということである。

大学の教室には Wi-Fi が来ていて、教室の全面の大きなスクリーンに、教師の PC からの映像が映し出され、皆が見るということはこれまでもなされてきたが、それだけでなく、教室で学生一人ひとりが自分の PC で、教師の指示したサイトや学生各自が検索したサイトを見ながら、授業を受け、一人一台の PC を使って学習や討論をするという新しい方法である。

馬居政幸・静岡大学名誉教授の「2022 年度静岡県立大学『総合的な学習・探求の時間』教育・指導法」の授業の詳細が、馬居教授の HP (<https://www.uer-labo.jp/#>) に掲載(公開)されているが、そのような授業が展開されていることがわかる。大学の遠隔授業だけでなく、対面授業も大きく変わる時代になっている。(2022年5月27日)

#### 1.5 「大学入試共通テスト」の国語の問題について

大学入試の制度に関してはいろいろ議論されることが多いが、大学入試問題の中身に関して議論されることは少ないように思う。今回の大学入試共通テストは、理系の平均点が低いようだが、文系科目の試験問題に問題はないのであろうか。たとえば、国語の平均点は前年より 8.7 点低いですが、数学などよりは高く妥当で、適切な問題が出されたとみなされている。ただ実際にその出題内容を見てみて、疑問に感じるものがいくつかあった。

現代文に関してしてみると、課題文がとても難解なことである。2022 年度の大学入試共通テストの国語の評論は、檜垣立哉・阪大教授と藤原辰史・京大准教授の「食べること」に関する哲学的な内容と、文学は内向の世代の黒井千次の「庭の男」の一節が出題されている。

今の若者(高校生)の読書離れがすすみ、長い文章を読めない書けない若者が増えている

と言われる中で、同一年齢の半数近く（約 53 万人）が受験する大学入試共通テストの試験の問題に、このような難解な文章を読ませる意味はあるのか。出題者は、受験生の活字リテラシィの実態をどの程度理解しているのか、何を意図してこのような難解な文章を出すのかと疑問に思う。

作家の黒井千次氏の「庭の男」の内容は、高齢者の生活心情がよく描かれていて同世代の老人が読むと感銘を受けるが、これを高校生に共感しろ、異文化理解が大事だというのは、あまりに押し付けがましいように思う。もう少し、高校生の心情に寄り添った内容の文章でないと、文章題の設問に対して、高校生の共感や理解を得るとするのは無理ではないかと思った。現代の大学入試の国語は、若者が老人の気持ちをどの程度理解できるかを測るというものなのであろうかと疑いたくなる。

現代文の設問を見ると、書かせる解答もあるが、大部分は4～6拓の中から、解釈として適切なものを選べというもので、もし課題文を全く読まないで、解答してもかなりの確率で正解に至ることができる。明らかにおかしい解答の選択文を除外すればさらに正解の確率が上がる。このように、数学などと違って、国語の場合内容を全く理解していなくても、正解に至る確率はある程度ある（社会や英語も同じであろう）ので、平均点が高いと言っても、問題がないわけではない。

作家の古井由吉の文章が大学入試で出題されることは多い。古井由吉の文章は独特で慣れないととても読みにくい。芥川賞を受賞した『杏子』は名文だが、わかりにくい。その冒頭部分を出題している大学もある。それは情景の描写と心理描写が入り交じり、何をいつているのか理解するのに苦労する。特異な人、マニユアックな人でないと好きになれない。それが入試によく出るということは、国文学者の古井ファンが国語の入試問題を作り、自分の好みの文章を選んでいるとしか思えない。一般の受験者に大学教員の好みを押し付けるのはいいことなのかと、少し疑問に思う。

別の見方も書いておく。安藤宏・東大教授は「なぜ国語に文学」という題で、「異質な他者に触れ、心情を思う」ことがこれからは大事ということで強調している（朝日新聞 1 月 22 日朝刊）。高齢化社会の中で若者に世代の違う高齢者という「異質な他者に触れ、その心情を思う」ことが必須になるというのなら、（上と逆に）今回の黒井千次の文章の出題は時代の要請に合い、きわめて適切なものであったともいえる。

上記は「若者の読み書き能力が高くない」という前提で書いているが、実際大学で学生に遠隔授業で資料を読ませそれへのコメントを書かせると、学生は難解な文章の内容を読み取り、いい文章でコメントを書いてくる。それは少数の学生ではなく、多くの学生に見られる傾向である。大人の世代が思う以上に、今の若者世代の読み書き能力は高いかもしれないとも思う。（2022 年 1 月 24 日）

## 16 大学教員と本

渡部昇一「知的生活の方法」(講談社現代新書,1976年)を読んだ時の衝撃は忘れられない。知的生活を送る為に、誰からも邪魔されない集中の時間が必要であり、その為には手元の参照する本を置いて置くことは必須であると書かれていた。優れた研究者や作家は皆立派な蔵書や書庫を持っているという。

そのような考えが、この頃少し揺らいできた。今はネットで何でも調べられる時代である。論文の引用は本からすべきと言われていたが、今はネットからの引用も許されるのでないか。写真もプリントアウトする必要はなく、デジタルで保存した方が見やすい。映画やドラマも、これまでは優れたものがDVD化され、それをレンタルして見るのが普通であったが、最近のドラマや映画はDVD化を考えず、(いつでのどこでも見れる)ネット配信だけのものもあるという(ネットフリックス等)。

同じように、本もデジタルで読む時代で、それを印刷した本として残す必要はなくなるのではないか。研究者が書く論文もデジタルで読むことができれば、それを印刷媒体に落とす必要がない。現に、学会の発表要旨も活字の冊子ではなく、デジタルで配布(配信)されるところが増えている。また大学のシラバスや紀要もネットで読むようになってきているところが多い。

研究者は、自分の研究の成果を、生きた証として後世に残すために本を出版したい、一般の人でも自分史を本にして後世に残したいと考える人は多いが、それは今のデジタルの時代に的確な方法なのか考える必要があるかもしれない。

上記のように書きながら、旧世代の者には本のない生活は考えられない。本(棚)に囲まれた部屋にいと落ち着く。本の題を見ただけで、その書籍に書かれていたことが思い浮かび、読んだ当時の心情が蘇る。どんなに意匠を凝らした建築や部屋でも本(棚)がおかれないと貧相に見える。どんな素晴らし自然や景色も、本(棚)に囲まれた部屋を超えることはできない(と私は思う)。このように、全く違う考えが、私の中で行き来する。(2022年1月25日)

## 17 放送大学について

私の放送大学との付き合いは長い。かれこれ30年以上になる。面接授業は、放送大学が千葉幕張に開校して以来、千葉学習センターの面接授業を20年以上担当した。初期の頃は、放送教材と面接授業がセットになっていた。確か私の担当した科目は「現代社会と教育」である。新井郁男先生や岡崎友典先生の番組のセットのものだったと思う。平日の夕方6時過ぎから8時過ぎまで4週に渡り講義して、受講生は50人を超えた時もあったが、最後の方は、2~3名の時もあった。最後の会が終わるとよく学生と食事会に行った。

放送大学では（かつては）卒論論文も必修で、その指導も、手伝った。文京学習センター専任の岡崎先生の手伝いで、卒論指導を何年か行い、指導の学生に上智大学の私の研究室に来てもらったり、代々木オリンピックセンターで合宿したりしたのが懐かしい。その後修士論文の指導もした。

番組作りは、『子ども・青年の生活と文化』（テレビ、心理学の藤崎先生と共同）、『子ども・若者の文化と生活』（ラジオ、岩田弘三先生と共同）の主任講師のほか、深谷昌志先生、新井郁男先生のテレビ番組に出させてもらったことがある。テレビやラジオは苦手という意識は最後まで消えなかった。

4年前より客員教授として勤めている東京文京学習センターでは、また「子ども・青年の特質と教育」と「大学と学生支援」（小林雅之、岩田弘三、鈴木美伸氏と共同）の面接授業を毎年開講した。その他に幅広い分野から面接講師を探し、お願いして、担当していただいた。教育に関する「自主ゼミ」も、月に2回ほど開講した。

放送大学の存在は、意外と一般に知られていない。暇な方は、番組を見たり聞いたり、学習センターを見学されることをお勧めする。（内容のレベルは、一般の大学と比べ遜色がない。いや、それ以上だと思う）。東京文京学習センターは、昨年全面改築になり、レンガ作りの外装だけでなく、中のインテリアもおしゃれで明るく、設備も充実している。

（2012年12月22日）

## 18 大学の公開講座について

今から四半世紀くらい前は、教育の世界では、生涯教育や生涯学習のことが盛んに言われた。学校教育中心の教育から生涯学習中心の教育への移行がいわれ、学校教育もその観点からの見直しがいわれた。大学もその一翼を担い、各大学は社会人入学や大学の公開講座を開設するところも増えた。私の勤めていた上智大学も公開講座（コミュニティ・カレッジ）の伝統があり、多くの講座を上智の専任教員が開設していた。私も高等教育関係の講座を3回ほど開設し、その記録を『大学とキャンパスライフ』（武内清編、上智大学出版、2005）として残した。

今は、この生涯学習についてあまり聞かないように思う。団塊の世代が高齢化して生涯学習を必要ないし継続している数は増えていると思うのだが、それが常態化しているせいなのか、必要性が説かれたり、新たなことが提案されたりするのを目にしないように思う。文部科学省のサイトで「生涯学習」というキーワード入れて検索してみると「第11期生涯学習分科会」というのがあり、そこで生涯学習のことが検討されているらしいことはわかる。ただその検討課題を見ると、「今般、社会全体のデジタル化が進む中、国は「デジタルの活用により、一人ひとりのニーズに合ったサービスを選ぶことができ、多様な幸せが実現できる社会」を目指すとし、「誰一人取り残さない、人に優しいデジタル化」を進めていくこと

としている。」とか、「高齢化が進む地域社会（基礎自治体の中心部を想定）において必要とされる社会システム・社会の閉塞感や活動の制約が増す中で、生涯学習・社会教育関係者の果たすべき役割」「今回は、生涯学習と若者を取り巻く環境」をテーマに議論を行いたい。」など、一般的で、斬新さが全く感じられない。

私の関係する敬愛大学にも「生涯学習センター」があり、千葉の広報にも載っている。独自の講座を開設するだけでなく、もう少し大学の授業を公開し、大学教育の生涯学習化をはかってもいいように思う。(2021年9月2日)